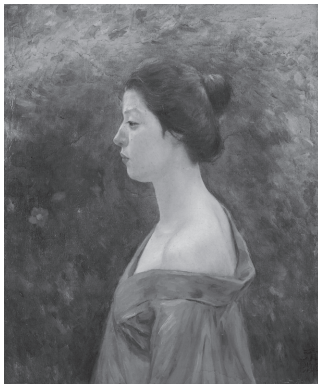


● 文展出品(その十六)『習作』

黒田 清輝氏

伊太利のフロランス派の畫には優美な貴婦人を描いたものが澤山ありますが、其を見るとよい感じが致しますから先年其れと同じ感じを與へるやうな日本婦人を描きたいと思ひ立ち、美人が艶々しい膚を現はしダリヤの咲いて居る庭前に立つて居る所を横から見つて寫生いたしました。が本年になつて漸く仕上り五月の光風會展覽會へ出品いたしましたもので、木苺と共に文展へ出しましたのです、大きは幅二尺、縦二尺四寸です

『万朝報』大正元年一〇月八日



黒田清輝《赤き衣を着たる女》
鹿児島県立歴史資料センター黎明館蔵

第六回文展(大正元年一〇月三日〜二月七日)に出品した《赤き衣を着たる女》(鹿児島県立歴史資料センター黎明館蔵)については、大正五年七月二日付『大阪毎日新聞』掲載の「女の顔 私の好きな」(『絵画の将来』所収)でも次のように語っている。

「この絵は、ルネッサンス時代のフロレンスの絵画によくあるやうな上品なスツキリとした優美——意気でない、野暮な優しさを描かうと思つて、頸なぞも思ひ切つて長くし、髪なども態と或る時代を現す一定の型に結はさないうで、顔の輪廓なども出来るだけ自分の考へてゐるやうに直したが、どうも十分には私の心持が現れなかつた」